

丹波黒大豆のエダマメ栽培における品質向上・増収技術

農業試験場

[研究のねらい]

近年、県内山間部(紀の川市鞆渚地区)では煮豆用丹波黒大豆の産地形成が進む一方で、エダマメ用の栽培が増えています。しかし、丹波黒大豆はその特性として一粒莢が多く、エダマメとして市場性の高い二粒莢を増やす栽培技術が望まれています。ここでは、開花期のかん水および生育初期の摘芯処理や株間隔が丹波黒大豆の生育やエダマメ収量・品質に及ぼす影響について検討しました。

[研究の成果]

1. 開花期にかん水することで丹波黒大豆の生育が促進され、かん水しない場合と比べて、エダマメ収量が約25%増加するとともに、二粒莢も増加します(図1、図2)。
2. 丹波黒大豆は定植後に5節で摘芯することで、草丈の伸長が抑えられ(表1)、エダマメ収量がやや増加します(データ省略)。
3. 畝幅100cm、1条植えの場合、株間50cm(2000株/10a)とすることで、40cmや45cmと比べて徒長せず(データ省略)、収量と二粒莢が多くなります(図3)。



図1 開花期のかん水と5節摘芯を行った丹波黒大豆

表1 5節摘芯が丹波黒大豆の生育に及ぼす影響

処理区	茎長 (cm)	分枝数 (本)	茎径 (mm)
無摘芯	90.4	6.8	20.8
摘芯	86.7	6.9	21.0

注)定植:2010年7月12日、畝幅:100cm、株間:45cm
摘芯:2010年7月28日

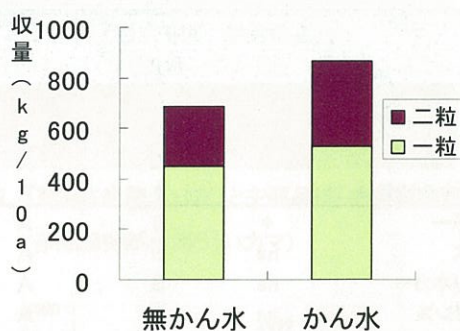


図2 開花期のかん水のエダマメ増収効果

注)かん水処理:2010年8月6日~8月30日迄
3~5日間隔で畝間かん水を実施、株間:45cm

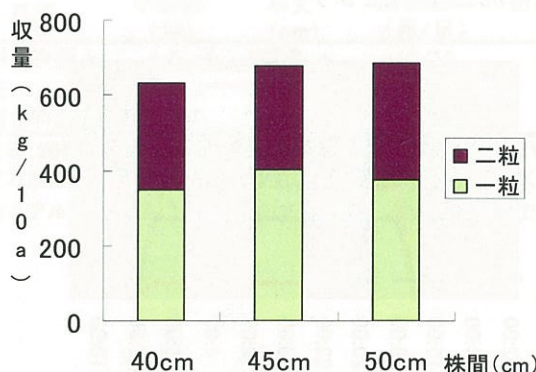


図3 株間隔がエダマメ収量に及ぼす影響

注)定植:2011年7月13日、開花期に5日間隔で畝間かん水を実施

[成果の活用面・留意点]

1. 本成果は、丹波黒大豆のエダマメ用移植栽培(黒マルチでマルチング)に適用します。
2. かん水は畝間かん水を行います。畝間かん水時は、畝間に長時間水をためないように注意します。
3. 摘芯処理は、草丈を抑えることができるため、倒伏対策としても活用できます。

(問い合わせ先 0736-64-2300)